
めまい

麻月千恵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めまい

【Nコード】

N5385E

【作者名】

麻月千恵

【あらすじ】

初恋の人の名前を聞いただけで。あのときの苦い思いがよみがえる。今は理解してくれる彼女もいて幸せなのに、それでもその人のことを思い出すだけで胸が痛い。そんな人と、ふいに再会してしまつたら…。

Section - 1

初めての恋は、思いを口にしても届くことなく終わった。
ただ、行き場のない思いだけが胸の中にある。

慣れ親しんだ渋谷の町を目的の喫茶店に向かって歩いていく途中、
ケータイがなった。長いバイブの振動が電話だと教えてくれる。デ
イスプレイを見て、すぐに通話ボタンを押した。

「もしもし？」

聞きなれた声が、「もしもし。智也？すこし授業が長引いてて、遅
れそうなんだ、待っててもらえる？」と告げた。いいよ、と答えて、
ケータイを切る。

ちらりと腕の時計を確認し、CD屋に寄るかどうか迷う。見上げる
と今にも降り出しそうな黒い雨雲が勢いよく流れていた。雨は嫌い
だ。

見慣れた道を通って、あの喫茶店まで。いつもの道で少しセンチ
メンタルになるのは、久しぶりにあの人の名前を聞いたからだろう
か。

思い出はふいによぎっては、胸を占める。

この道を手をつないで歩いた日。

忘れたはずの思いが不快感となつて、あつという間に広がっていく。
仕方なくタバコに手をのばし、立ち止まった。

何年たてば、小さくうずく胸の痛みは消えてくれるのだろうか？

春の風のようにいたずらに、かき乱す。

目を閉じる。

あの人を精一杯愛した自分を思い出す。そしてタバコに火をつける。

「似合わない恋をしただけ。」

言い聞かせてる。

「強がらなくてもいいんだよ？」

初めてそう言ってくれた人が、今、自分の一番近くにいて、それがこんなに幸せなのに。

「私、本当はココア好きなんだ。」

いたずらっぽく笑って見せたあの人の顔をもうおぼろげにしか思い出せないのに。

美化されつづける記憶に、立ち向かう術が思い浮かばない。

目を開けた。

その衝動を無理におさめる空しさを、何回やり過ごせば忘れられるだろう。

タバコを吸い終わると、智也は待ち合わせの喫茶店まで、ゆっくりと歩き出した。

第一印象は物静かな人。

姉の友達とは思えないほど、おとなしく優しげに微笑む。

最初はただその姿を見つめているだけだった。

ただ、小さく風が吹いた。

彼女の髪が、舞った。

それだけだった。

どんな言葉でも、その瞬間のことを言い尽くすことはできない。

どこか頼りなげに目を伏せたその瞬間。

7才年上の姉の友人は、その後いつもどおり微笑んだ。

恥ずかしくて目を伏せた。

それが恋と呼べるものだと知らずに、ただ、胸の高鳴りを抱えて、姉が彼女をつれてくるのを楽しみに待った。姉が自分を邪険に扱っても、しきりに彼女に話し掛けた。

彼女が自分の話を聞く。友人をとられた姉は、自分を邪魔者扱いし、くちげんかになる。

すると彼女は、それを愛しげに見つめ、「うらやましい」と笑うのだった。

「あんだ、本当に佳代が好きね」

ある日、彼女が帰ったあと、姉が言った。

「んなことねえよ。」

「だって、他の友達が来ても見向きもしないのに、佳代が来た時だけ、お茶持ってきたりするじゃない。」

「いつもやってるよ。」

「…あんまりまとわりつくんじゃないわよ?」

「んなつもりないよ。」

「どうだか。まあ、佳代もあんたのこと気に入ってるから、いいけどさ。」

急に胸が熱くなった。

「そうなの?」

声がちよつと上ずる。

「なによ、そんな嬉しそうな顔しちゃって。」

「いや、別に。」

「うらやましいんじゃない? 佳代、兄弟いないから。あんたみたいな弟がいたら楽しいだろうな、ってさ。」

その瞬間、冷や水を浴びせかけられたように、急に寒くなった。

「兄弟げんかがうらやましいんだって。あんたみたいにむかつく奴でもないよりはましなのかな?」

熱くなっていたはずの胸が急速に冷えていくのが分かる。

「何よ? 急に黙って。」

姉に聞かれても何をいえばいいのか分からず、言葉を見つけようとした。

「変なの。ほら、これ、片付けといてよ。いつもやってるんでしょ?」

そついやみつぽくいつて、飲みかけのコップをそのままに、姉は自分の部屋に戻ってしまった。

それを流しに運びながら思っていた。

この苦しさはなんだろう?

佳代さんに気に入られているのは嬉しいのに…。

ただ、苦しきだけ。

思いの名前を知ったのは、梅雨。

毎日がどんよりとした曇り空で、気分までもがめいつていた。放課後、帰り際。窓から校庭で必死に練習するサッカー部の連中を眺めて。

彼らの姿が、どこからどう見ても子供に思えた。きつと自分もそうなんだろうと思うと、なんだか心が重くなっていくように思えた。ずつと佳代さんのことを考えていた。

15歳になるには、あと半年以上も待たなければならなかった。佳代さんは、大学4年生。来年自分が高校生になる頃、彼女は就職して、社会人になる。年が離れすぎている気がして。

ふと二人が並んで歩くシーンを想像してみたりした。思わず笑えて来た。

なんだか悲しくなった。

雨が降り出す前に帰ったが、家につく直前にひどい雨に合った。ようやく家について、風呂場からバスタオルを取りだしたところでケータイになる。

姉だった。ひどい雨なので駅前まで傘を持って迎えにこい、と言う。

返信で抵抗してみるものの、逆らえるわけもなく、憂鬱さにため息をついて家を出た。

外の雨は思ったよりも小降りになっていた。

姉のお気に入りのお傘を持ち、駅前のファミレスまで。

窓際に座る姉の目の前に座っている佳代さんの姿を見つけたとき、俺の胸は高鳴った。

さっきまで憂鬱の種だった雨に、感謝しなくなった。

店に入り、姉の座る席に近づいていくと、佳代さんの隣りにもう一人座っていることに気がついた。そして、立ち止まった。

「あ、智也君来たよ。」

佳代さんの声がとても遠くで聞こえた気がした。姉が振り向いて、

自分の名前を呼び、遅いと文句を言う。その言葉すら、耳を通り抜けていくただの音に感じた。

「何してんの？座んなさいよ。傘持ってきた代わりにおごってあげるわよ。」

姉の言葉で反射的に動き出す。

その間、佳代さんの隣りに座っている男を眺めていた。

その距離が、近さが、そこに座っているだけで「佳代さんの特別」だと教えてくれる。

頭では理解できるはずなのに、気持ちが少しもついていけなかった。なんともいえない感情がごちゃ混ぜになって頭を支配した。

「智也、ほら挨拶しなさいよ。大学でお世話になってる近藤さん。」姉の声が通り過ぎていく。

目の中に入ってくるのは、上品なポロシャツを着て、爽やかに笑う男の姿。

「初めまして、智也君。」

もう、この思いは諦めなければならぬのだと、頭の中で誰かがささやいた。

ところで、「思い」ってなんだ？

佳代さんを見た。

そうか。

佳代さんが好きなんだ。

「ほら、智也！」

姉に急かされて、自分は何かを言ったのだろう。

そして姉の横に座って、男と佳代さんと姉と4人で他愛ない話をしたのだろう。

「ほんと、いい弟さんだね。」

私も智也君みたいな弟が欲しかったな」

覚えているのは、佳代さんに言われたその言葉。抜けないトゲのようにぐさりと胸に突き刺さる。

嫌だ。

弟は。

頭の中は、それだけで一杯だった。

佳代さんの右手に、ずっと同じ指輪が光っているのを知っていた。それと同じものを、近藤という男がつけているのを見つけて頭に血が上った。

それからのは、本当に何ひとつ覚えていない。

家に帰って、「態度が変だ」と姉に散々言われたが、それも覚えていない。

自分の部屋に戻り、ひきっぱなしの布団の上に倒れこむように寝そべった。

電気もつけずにいた部屋の中で、コンポのPOWERボタンが青く光っているのが見えた。

その光がやけにまぶしくて寝返りをうった。

仰向けで天井を見つめて、笑った。何がおかしいのかわからなかった。

目の端から雫が落ちた。

好きだと思った瞬間に、終わった。

いや、多分そんな結果は分かっていた。

苦しさは明確な痛みとなって、ただ涙だけがあふれた。

雨の降る日に、いい思い出がないのは、そのときからだろう。

感傷に襲われ、タバコをふかしていたせいで、目的地についた時には小ぶりの雨になっていた。年季の入ったその喫茶店のドアを、ゆっくりと開けると、シャラシャラという鈴の音が響く。カウンタ―にいるのは、最近入ってきたばかりの若い店員の大木だ。「いらっしゃい。」と少し穏かな声で迎えてくれる。

「あれ、降って来たんですか？」

「ちよつとだけ。」

「タオル、出しましょうか？」

「そんなにぬれてないから。あれ？今日は店長はお休み？」

「いますよ。」

そう言つて、大木が指を指す方を見ると、店長は窓際の客と話をしているようだった。

「昔の常連さんが来たらしいですよ。」

「そう。」

様子をうかがいながら、カウンターに座る。

「いつものでいいですか？」

大木の問いに、うなづきかけて、やめた。

「…ココアってあつたよね？」

「ありますよ。」

「ミルクココアとか…時間かかるかな？」

「そんな遠慮しないでくださいよ。うちは大抵のものは作れますから。」

それにしても、ココアって不思議な飲み物ですよ。いつもはあんまりないのに、一人頼むと連鎖的に注文はいるんですよ…なんだろう？」

「そんなもんなの？」

「そうそう。あの人もココア頼んでたから。」

大木はそういつて、店長が話している常連のほうに目配せした。つられて店長のいる窓際の席を眺めた。店長の後ろ姿で、昔の常連の顔は見えなかった。けれど、洋服からして女性のようなだった。

「甘いの、飲めるんですね。」

大木が、俺に水を出しながら言う。

「昔は、コーヒーが飲めなくてココア飲んだな。」

俺は視線を戻しながら答える。

「へえ、金沢さんにもそんな時代があつたんですね。」

「まあね。」

あの頃、彼女はいつもコーヒーを飲んでいて、苦すぎてコーヒーが好きになれなかった自分は、ココアを飲んでいたと思う。この喫茶店に入るのさえときどきしていたあの頃。

ココアの甘さには懐かしさがつまっている。彼女を思い出すとき、必ずココアを飲むのは、その思い出を少しでも懐かしく思いたいからかもしれない。

懐かしい「思い出」にしてしまいたい。

俺は戻した視線をもう一度、窓際の客に向けた。

その時、店長が客から離れ、こちらの方に歩き出した。

店長の陰に隠れて見えなかった客の顔が、視界に入った。

その視線と、俺の視線が、絡んだ。

彼女は驚いたように目を見開いた。しかし、すぐに表情を戻した。

俺は、カウンターの席を立ち上がった。

「金沢さん？どうかしたんですか？」

大木が俺に尋ねる声が聞こえたが、俺は視界にある、彼女の姿のこ
としか考えられなかった。そして、俺は彼女が座っている窓際の席
に向かってゆっくりと歩き出した。

彼女は近づく俺に微笑みかけた。

俺は、彼女の前にたどりつくと、ゆっくりと口を開いた。

「久しぶり、だね。佳代さん。」

彼女は、俺の言葉に動揺もせず、あの時と同じようににこりと笑っ
て答えた。

「久しぶり。元気だった？」

「まあね。ここ座っていい？せっかく会ったんだから、いいでしょ
？」

答えを待たずに、俺は彼女の前に座った。

彼女の静かに微笑むその顔を、さっきまではおぼろげにしか思い出
せなかったのに。

胸が痛んでいるのか、それとも高鳴っているのか、鼓動が熱くなり、
手が震えているのを必死に隠した。

目の前でココアを飲む彼女は、自分の記憶よりもずっと子供っぽ
く見えた。

それは伸びた身長の子のせいなのか、あの時飲めなかったコーヒーを毎

日飲めるほど大人になったからなのか。

大木がココアを運んできた。

雰囲気を感じたのか、最低限の会話で去っていく。

「ココア、まだ好きなの？」

ふいに、彼女が聞いた。

突然のことで、びつくりして、一瞬戸惑ってしまう。まだどう話しているかわからない。

「いや、そんなことないよ。今はコーヒの方が好きぐらいで言い訳みたいな言い方になってしまった。」

「そうだね、もう大学生？になるんだっけ？」

「そう、もう3年」

「もう就職活動？早いね。なんか大人っぽくなっちゃって、驚いた。」

そう笑った彼女の顔が、少し寂しそうに見えた。

「佳代さんは、変わらないね。」

そういうと、彼女は一瞬おどろいた顔をして、視線を窓にずらした。少しの沈黙の後、佳代さんが視線を戻して言った。

「…礼子、結婚するんだって？」

「うん。そう。」

「おめでとう。相手はどんな人？」

「…姉さんと会ってないの？」

佳代さんは少し困ったような顔をした。

「社会人になると、忙しくてなかなか会えなくなってしまっただよね…。結婚のことも招待状が来て初めて知ったの。」

なんとなく分かっていることではあった。姉の口から佳代さんの名前が出なくなったのがいつからかは覚えていない。姉と佳代さんは高校時代からの友人で、うちにもずいぶん遊びに来ていた。とても仲がよくなっていたのに。でも、姉と佳代さんが疎遠になったことをどこかでぼっとしている自分もいた。姉が佳代さんの名前を出さなければ、俺は佳代さんを思い出さずにいられた。そうやって佳代

さんのことを心の奥底に閉じ込めた。

「姉さんとは正反対の、物静かな人だよ。でも、姉さんのことをすごく愛してる人。」

そう答えた。

それを聞いた佳代さんは穏かに笑った。

「そう、きつといい人なんだろうな。うらやましい。」

そう言って彼女はココアを一口のんで、再び窓の外を見つめた。

「ひどい雨だね。」

俺もつられて外を見た。

「そうだね。」

「ここは、変わらないな。久しぶりに来たらこのあたり全然変わっちゃってて取り残された気分になったけど、この店があって安心した。」

窓から視線を戻し、佳代さんの横顔を盗み見た。

セピア色だった風景に、色がついていくように、心の奥底にしまっていた何かが、再び動き出そうとしている。

でも。

俺は心の中で、変わりつつある自分を制した。

だから何だって言うんだ？

二人の間にはもう何も生まれはしない。それはあの時に思い知らされたはずだった。

俺は確かめるように彼女の左手の薬指を盗み見た。

それが、俺に現実を教えてくれるはずなのだ。

あの時も思い知らされた、彼女の現実。

「…なんで？」

思わず口に出していた。

佳代さんが視線を俺に向けた。何のことかわからないと言った顔でこちらを見つめていた。

「結婚、するって言ってたよね？」

その問いに、佳代さんはひどくおどろいた顔をして、慌てて左手を

隠した。

「…指輪、なんで？」

佳代さんは明らかに動揺した顔をしていた。

「今日は、たまたまつけてないだけ…。うまくいつてるのよ。」

あの頃は佳代さんの言うことを疑いもせずすべて信じていた。
でも今はわかる。

彼女は嘘をついている。

あの頃は、佳代さんが言うことはすべて真実だと思っていた。

少しでも疑えば、佳代さんに嫌われる気がした。

「佳代さんのこと、ずっと待ってた。ここで…って言ったらどうする？」

思わず、口から言葉が滑り出た。

彼女の動揺をあおるようにココアを一口飲む。

「ねえ、佳代さん、俺、遊びの分かる年になったよ。」

その言葉にどんな反応をするのか、佳代さんを見つめようとしたとき、来店をつげるベルが響いた。振り返ると、見慣れた顔が中に入ってくるのが見えた。

軽く手をあげて、美穂が「智也！」と自分を呼ぶ。

美穂が、こちらに向かって歩いてくる。俺は佳代さんを盗み見た。佳代さんは今まで見せたことのない、引き攣った顔をしていた。

何が佳代さんをそんな顔にさせるのか、それは、「美穂」の存在なのか。

そうであるなら、いいと思った。

不思議な気分だった。

復讐しているような爽快感と、彼女を傷つけている、その罪悪感。ごちゃまぜになった頭を落ち着けるように、隣りに座った美穂の体温を感じた。

「どなた？」美穂が聞く。

「礼子姉ちゃんの友達の佳代さん。佳代さん、こっちは彼女的美穂。」

俺は双方を紹介する。

「初めまして、美穂です。」

「初めまして、大塚佳代といいます。じゃあ、私、二人のじゃましたら悪いから、この辺で。」

佳代さんが立ち上がった。

「待って」

俺がひきとめた。

困った顔の佳代さんに、いかにももつともらしいことを言った。

「今、まだ雨ひどいから、もう少しお茶しませんか？」

美穂はいいよね？」

有無を言わさないように。佳代さんに強い視線を向けた。

けれど佳代さんは、その視線に首を振った。

「ありがとう。でも、次の予定があるのよ。じゃあ、また。礼子の結婚式で。」

もう佳代さんは、いつもの穏かな表情に戻って笑っている。

「姉の結婚式のこととで相談にのってほしいことがあるんです。連絡先教えてもらっていいですか？」

俺は無理やり携帯を出し、佳代さんを促した。

なんでそんなことをしているのか、自分でも理解が出来なかった。でも、もう一度会いたい。

会って話がしたい。

俺は、彼女の携帯の番号をいそいで自分の携帯に移した。

「連絡、しますね」

彼女は何も言わずに、携帯をしまうと、店を後にした。

俺が振り返ると、美穂が不安げな顔で座っていた。

「…なんだか雰囲気のある人だね。今まで会ったお姉さんの友達にはいない感じの人…」

俺が席に戻ると、美穂がそう言っ、佳代さんの後ろ姿を見つめている。

「姉さんの友人の中では珍しいかもな。」

「…相談って何？」

おもむろに、美穂が聞いた。

「…2次会の企画のこととか。」

俺はごまかして答えた。

「そう。」

「…あの人が結婚してるから、経験談とか含めて聞こうかなって思ってたさ。」

美穂に告げたその一言が、自分の中の熱を急速に冷ましていくような気がした。

その言葉で美穂の疑念を取り除けたかには自信がない。

けれど、わかることは。

俺が知っている佳代さんの真実はそれだけだ。

そして、それが俺が思いを告げても届かなかった理由だ。

でも、今は違うかもしれない。

あの時の絶望的な思いが、今になって報われるとでも言うのか？
わずかな期待が粉々に打ち砕かれた、あの瞬間を忘れたとでもいうのか？

たくさんさんの思いが交錯して、俺は美穂の前なのにあまり話しが出来ずに窓を見つめていた。

通り雨ならいつか止むだろう。

けれど、佳代さんの薬指から忽然と消えている指輪のことが頭をよぎる。

その日の雨は、結局止まなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5385e/>

めまい

2010年10月10日06時33分発行